

## 第3回県民公開医療シンポ開く

「地域が支える医療」をテーマに市民や医療関係者参加し論議深める



地域の医療は地域で支える一をテーマにした第3回県民公開医療シンポジウム「ストップ・ザ医療崩壊Ⅱ」が10月24日、久留米市野中町の石橋文化センター共同ホールで開かれ、市民や医療関係者など約360人が参加した中で活発な論議を行いました。社団法人・県病院協会主催。企画運営を聖マリア病院が担当し、藤堂景茂顧問が運営委員長を務めました。

過去2回のシンポジウムでは、医師不足など深刻な状況に陥っている医療の現場と、医師たちの奮闘ぶりを浮き彫りにしました。今回、これまでの論議を踏まえて、医療再生への道のりを、地域住民と医療機関との連携の視点から探りました。

初めに、東大名誉教授で経済学者の宇沢弘文氏が「社会的共通資本としての医療」と題して基調講演を行い、1980年代以降、市場原理主義の導入による医療費抑制、その結果生じた医師不足など様々なひずみを指摘し、医療態勢の立て直しが急務であることを訴えました。

この後、丹波新聞記者の足立智和氏▽久留米小児科医会会長の井上謙吉氏▽久留米大学医学教育学教授の神代龍吉氏▽厚生労働省医師臨床研修推進室長の田原克志氏の4氏による講演と総合討論会を開きました。

足立記者は、兵庫県立柏原（かいばら）病院小児科があわや医師ゼロの危機に直面した際に、母親たちが署名など草の根活動で医師確保に結び付けた事例を紹介。井上会長が2006年4月に地域の開業医の協力でスタートした久留米広域小児救急センター（聖マリア病院内）の3年間の成果を、また神代教授が地域ぐるみでの医師育成について、さらに田原室長が臨床研修医の地域定着について国の政策を報告するなど、医療の現状と再構築について分析・提言を行いました。



会場の参加者からも、小児科をはじめ女性医師が増える中で、出産・子育てを抱えた女性医師が働きやすい制度づくりを問題提起するなど論議を深めました。

最後に、座長の県社会保険医療協会会長の吉村恭幸氏が「(医療を支えるのは) 医師と患者のパートナーシップ」と強調しました。